



◎中野学園を母体に男女別学校として開校。建学の精神は「質実剛毅」「協同自治」。1994年に共学化。明治大の付属校の1つとして、毎年約8割の卒業生が同大に進学する。2011年度、高校卓球部が関東新人大会で優勝。

設立

1984(昭和59)年

形態

全日制/普通科/共学

生徒数

1学年中学校160人、高校315人

11年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、筑波大、東京外国語大、首都大東京などに5人が合格。私立大は、明治大に249人が進学の他、東京理科大、早稲田大などに56人が合格。

住所

〒192-0001
東京都八王子市戸吹町1100

電話

042-691-0321

Web Site

<http://www.mnh.ed.jp/>

東京都・私立

明治大学附属中野八王子中学・高校

大学付属校の進路指導

生徒の甘えを取り除く 徹底した指導で 意識と学力の向上を図る

変革のステップ

背景

◎中学校入試の志願者数の減少、明治大から学力向上の要請などにより、学力低下に対する課題意識が高まる

実践

◎「生活カード」による学習習慣の定着、予習・復習や課題、小テストの徹底により基礎学力の向上を図る

成果

◎学力が向上。学習に対する生徒の意欲、学力向上への指導に対する教師の意識も高まる

STEP 1

STEP 2

STEP 3

「付属校」という甘えが
学習意欲の低下を招く

明治大学附属中野八王子中学・高校は、東京西部の自然豊かな八王子市の丘陵に立地する中高一貫校である。明治大の付属校の1つで、毎年約8割の生徒が内部進学する。

同校が学力向上策に着手したのは、10年程前のことだった。他の付属校に比べて知名度が低く、最寄り駅からバスで15〜25分という立地上の不利もあり、一時期、女子生徒の志願倍率が1倍近くまで落ち込んだ。進路指導主任の矢作健輔先生は次のように述べる。

「本校には中学校受験を勝ち抜いた優秀な生徒が大勢入学しますが、明治大への入学がある程度保証されていることもあり、学習に対するモチベーションを維持するのは容易ではありません。明治大に入ることを目的とするのではなく、大学で中心人物として活躍できる学力や素養を身に付けさせることによって中学校、高校としての魅力を増し、受験生に選ばれる学校となる必要性を感じました」

明治大から寄せられる期待も、年々高まっている。「内部進学者は、他の学生に比べて学力が低い」「学ぶ意欲はあるのか」「もっと学力を伸ばしてほしい」。そうした要望を、大学入学時に行われる英語テストのスコアやGPA

(*1) といった具体的な数字と共に突き付けられた。永田宏教頭は次のように述べる。

「付属校出身の学生には、大学の中心となつて他の学生をリードする役割が求められています。本校の卒業生には学部長賞を受賞するほど優秀な学生もいますが、どうしても成績下位層の学生が目についてしまいます。『明治大への進学は決まったも同然』という生徒の甘えを拭いきり、本校入学後こそがスタートであることを意識させる必要があると感じていました」



永田 宏 *ながた ひろし*
明治大学付属中野八王子中学・高校教頭
教職歴29年。同校に赴任して27年目。「常に生徒の Handbook であり、憧れの大人像であるよう心掛けている」



矢作 健輔 *やはぎ けんすけ*
明治大学付属中野八王子中学・高校
教職歴・同校赴任歴共に22年。進路指導主任。「勉強でも部活動でも頑張る生徒は輝いている。いつもそばにいて手助けし、喜びを分かち合いたい」



芦澤 健雄 *あしざわ たけお*
明治大学付属中野八王子中学・高校
教職歴・同校赴任歴共に21年。中学2学年担任。広報委員長。「学問の習得が、人格形成につながるような学びの場づくりをしたい」



田中 秀明 *たなか ひであき*
明治大学付属中野八王子中学・高校
教職歴・同校赴任歴共に17年。中学1学年主任。「人として大切なことを伝え、当たり前前を当たり前前に出来る人を育てたい」

「生活カード」を活用し 生徒に家庭学習習慣を定着させる

付属校での指導の難しさは、一般的な高校に比べて大学入試のハードルが低いため、生徒が学習に対する目的意識を持ちにくく、家庭学習習慣が定着しづらいことだ。

家庭学習習慣の定着のために同校が活用するのは、生活記録表だ。中学校では、2010年度の中学1年生から「生活カード」を取り入れ、起床・帰宅時間、家庭学習時間と取り組んだ教科など、学習と生活の記録を毎日記入・提出させ、担任がコメントを書いて返却している。家庭学習の目標時間は、中学1年生の2学期までは60分、3学期以降は90分とした(P.22図)。

カードには保護者からのコメント欄を設け、家庭と学校が共に子どもを見守る意識を醸成できるようにした。その結果、カードを導入した11年度の中学2年生は、数年前と比較すると平日・休日共に約30分程、家庭学習時間が増加したという。中学1年生学年主任の田中秀明先生は、その効果について次のように語る。

「中学1年生は入学したばかりで緊張感がある上、生徒の学力差がそれほど開いていないので、学習した成果が成績に反映されやすい傾向があります。実際、学習時間の多い生徒ほど成績も良いという結果が明確に出ています。生徒にはそのことをきちんと伝え、学

習時間と成績の相関を実感させることで、生徒に家庭学習の重要性を意識させています」
また、同校は付属校でありながら、生徒の学習意欲を継続するため、国公立大受験を奨励している。

「明治大への内部進学が決まる高校3年生の12月以降になると、勉強しなくなる生徒が少なくありません。そこで、国公立大の受験を奨励することによって、3年生の3学期になつても学習意欲を保つことが出来るのではないかと考えました」(矢作先生)

国公立大受験への意識付けとして、国語では中学1年生からセンター試験の現代文に取り組ませている。早い時期から難易度の高い問題を解かせることで知的好奇心を高め、同時に進路意識を醸成している。

予習・復習や課題は 最後までやり遂げさせる

中学校では、予習や課題、小テストなど、一つひとつの指導の徹底化も図った。例えば、英語では、予習を必須とし、取り組んでこなかった生徒は予習が終わるまで授業に参加させないようにした。英語科の芦澤健雄先生は次のように述べる。

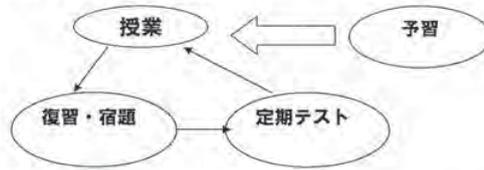
「生徒を学習に向かわせるにはまず意欲を喚起すべきだとよくいわれますが、私は順序

*プロフィールは2012年3月時点のものです

*1 Grade Point Average の略。各科目の成績を数値化して算出する、学生の単位当たりの成績評価値

成績を向上させるに当たって

「中学生になっていますか??」 小学校7年生ではありません・・・
 メイハチに入って高かった学習意欲が学校生活に慣れたこの時期に低下しています・・・
 ここで生活・学習習慣について見直しが必要です。「小学校7年生」ではなくて、「中学生」です。
 《中学校の学習サイクル》



上のように、「授業で学習したことを自宅で復習し、定期テストに臨む」というサイクルが必要です。そのために・・・

- (1) 自宅学習の開始時間を決める
 毎日の学習時間を固定することで、学習計画も立てやすくなり、一定の自宅学習時間が確保できます。
- (2) 学習時間の目標を設定する
 学習内容が難しくなっているので、自宅学習が重要です。家庭学習60分では足りません。90分以上の目標を設定しましょう。
- (3) 部活動と学習を両立させる
 部活動に参加し、積極的に取り組んでいます。しかし学習との両立に悩む生徒も多くなっています。休日の過ごし方の工夫など、学習と部活動の両立するための自分のペースを作りましょう!!

学習時間は成績に比例する

成績	学習時間
9段階	161.8時間
8段階	136.5時間
7段階	118時間
6段階	120.4時間
5段階	62.5時間

前期期末後から後期中間までの学習時間をみんなに計算してもらいました。今回も同じ事が言えますね。つまり、いかに学習時間を確保するかが成績の向上に繋がるのです。内容も難しくなっていますので、毎日90分の時間の確保が必須です。

中学1年生に家庭学習の指導として配布するプリント。データを基に、家庭学習時間と成績の関係を示し、学習量がいかに成績に反映するかを実感させる
 *学校資料をそのまま掲載

が逆だと思えます。中学・高校で習得しなければならぬ内容をしっかりと身に付けたところから、やりたいこと、知りたいことが出てくるのではないのでしょうか。ですから、基礎を徹底させるために、予習や課題提出は必須、やらないという選択肢はないことを生徒に強く意識付けるように心掛けています」

数学は復習が中心で、単元が終わるごとに演習問題のプリントを課す。もちろん提出は必須で、出すまで徹底的にチェックする。課題の量は多く、ある生徒が中学1年生の4～12月の課

題プリントを重ねて厚さを測ったところ15cmもあったという。また、数学も英語も、小テストの追試は合格するまで何度でも繰り返す。「課題を提出しない生徒は学校に残しても終わらせ、場合によっては保護者に連絡して注意を促し、必ず提出させています。私たちが少しでも指導を緩めたり諦めたりすれば、生徒はすぐにそれを察して手を抜こうとします。中学1年生の時から徹底的に指導することで、そうした学習が当たり前だと思わせることが大切です」(田中先生)

テンポの良い授業展開と繰り返しで定着を図る

学力向上策で重要になるのは、何といっても授業改善である。

「生徒の学力は今のままでよいのかという議論は、大学から生徒の学力向上への要望が来る前から英語科で話し合っていました。当時の生徒の英語力を見ると、少なくとも私た

定期考査で成績が下位だった生徒に対する補習も徹底的に行った。以前は、指名を受けた時点で自分は駄目だと思い込み、それだけでやる気を失う生徒もいた。今は、学力が付いたことを生徒自身が実感できるまで丁寧に指導するため、生徒も諦めずに意欲的に取り組むようになったという。たとえ補習に指名されたとしても、補習を受けて次のテストで良い結果が出れば、それが成功体験となって次のステップにつながっていく。そこから教師への信頼感も生まれ、学校全体の一体感が醸成されていくのである。

「例えば、私の授業は成績中位層の上の方にレベルを合わせているので、付いてこれない生徒が出てくることも想定しています。しかし、学校がきめ細かく支援することをあらかじめ伝えてるので、そうした生徒もまずは教師の言う通りに取り組んでみようという気持ちになるようです」(荻澤先生)

ちが中高生だった時の学力には達していませんでした。検定試験の合格、あるいは実用的な英会話の習得だけではなく、学校教育の使命として学問の基礎を体系的に身に付けさせる授業が必要だと感じました」(芦澤先生)

芦澤先生の英語の授業は、50分を3〜15分のパートに分けて進めているのが特徴だ。冒頭の10分で前時の復習、次の15分で基本本文の発音と解説、次に本文のリスニングと単語・熟語の解説というように、解説と活動をテンポ良く切り替えて、飽きない授業を心掛けている。

2つめの特徴は、重要な部分は繰り返し学べるよう、スパイラルに授業を組み立てていることだ。本文に触れた後、確認プリントに取り組み、次の授業の冒頭で小テストを行う。更に、週1回の小テストで同じ内容を出題し、合格するまで追試を繰り返す。何度も反復することで学習内容の定着を促していくのである。

「当初は授業展開の速さに戸惑っていた生徒も、自分なりに学習方法を工夫するようになりました。ただ、この方法で効果を上げるためには、毎年変わる生徒や教科書に合わせて、授業の組み立てや内容を変えていく必要があります。私たちも勉強し続けなければなりません。そうしたことも含めて、教師の学ぶ姿勢を見せること自体が、生徒の学びへの意欲を喚起すると考えます」(芦澤先生)

更に、中学校の英語科では、学年統一の指導

案を作り、全ての教師で共有しようという試みを始めた。同じ指導案で授業を行い、教師の指導力の差を埋め、学力向上を図ることが狙いだ。

学力調査の結果分析で課題を把握し、教師の競争意識を刺激

生徒の意識改革を進める一方、教師の意識改革も進めた。中学校で導入しているベネッセの「学力推移調査」(*2)の活用もその1つだ。

「外部模試なども、以前は組織として結果を検証していませんでした。今は、試験結果を分析し、報告会を開いて、学年ごとの成績を共有し、教科ごとの課題を明らかにして指導改善を促しています。他の学年の同時期の数値との比較を通して、良い意味での競争意識が芽生え、結果的に生徒の学力向上に結び付いていると感じます」(矢作先生)

教師の意識を高めるには、学年を引っ張る主任のリーダーシップも重要だ。中学1年生では、11年度に初めて学年主任となった田中先生が、年度当初に不転の決意を披歴して担任団に結束を呼び掛けた。

「先生方の足並みをそろえるには、最初が肝心です。『生活カード』や課題・追試の徹底など、担任の負担は小さくありませんが、学年主任としての私の決意を伝え、先生方に理解していただきました。それが学年の活気

にもつながっていると思います」(田中先生)

改革の成果は学力の伸びに表れている。例えば、中学2年生の学力推移調査の結果では、国語・数学・英語の3教科総合の平均偏差値が2年前と比べて約6ポイント上昇した。中でも、英語は約9ポイント上昇し、授業改善の成果が顕著に見られる。また、進路意識については、国公立大へも2年連続で5人が合格するなど、生徒の意識は徐々に外にも向けられつつある。こうした成果を受けて、当初は尻込みをしていた教師も積極的に指導変革にかかわるようになってきたのも大きな変化だ。

「学校現場は理想だけでは動きません。先生方の意識を変えるには、まず結果を出すことが大切です。何よりも生徒の学力が実際に向上したことが、他の教師を動かすことにつながるのだと思います」(芦澤先生)

今後の課題は、行事や部活動と勉強の両立をいかに図っていくかである。

「生徒の社会性や協調性を育む上で行事や部活動は欠かせません。しかし、近年は学力向上に傾倒するあまり行事は縮小傾向にあります。勉強と行事・部活動が両輪となることで学校に活気が生まれます。教師・生徒が良い緊張感を保ちながら、文武にバランスの取れた指導を追求することが、大学や社会で活躍できる人材の育成につながっていくのだと思います」(永田教頭)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年9月号指導変革の軌跡「愛知県・私立春日丘中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)